

「花の回廊」へようこそ (3)

2023. 02. 20

## はじめに

①2月28日に、秋津マキ子の写真集が発行される(日本写真企画発行)。

タイトルは『花に染む』。出家してからもなお、桜への想いを断ちきれなかった西行法師の歌にちなんだ。

花に染む 心のいかで 残りけん 捨て果ててきと 思ふわが身に

(出家して世俗への執着は捨てたはずなのに、桜を想うと花に染まり、身も心も花と一体となってしまう。この世捨て人に、なぜ桜への想いがこれほど残っているのか。以上は矢部の超訳)。

②子育ての頃、秋津は海洋生物学者レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』を愛読していた。

レイチェルは、メイン州（米国）の岬で、幾夜となく遙かな星空や天の川を眺め、宇宙の美しさと神秘に触れた。花も草も虫もそして人も、大いなる自然の鼓動の一つにすぎない。路傍の花にさえ、宇宙の神秘は宿る。彼女は「自然への畏敬」をくり返し語った。

秋津は、原文を暗唱するほど、レイチェルの自然観にのめり込んだ。本写真集にはその影響が色濃く見られる。

③秋津が独学で写真を学び始めて以来、20年近く。最初は東京で、最近はパリ、チロル、ザグレブなど、内外で個展を開いてきた。

過去の二冊の写真集はいずれも英文なので、今回がはじめての和文の出版である。

本写真集には「花の息吹を感じる」と、来場者に好評だった 59 点を収めた。

彼女の歩みを知るちょうどよい機会なので、同書からご挨拶を転載する。

「命の輝きと移ろい」を見つめて

花の半島にて

子育ても終わり、50代になったばかりの頃でした。夫が「花の半島」でアトリエを構えました。

天城連山と黒潮に囲まれた伊豆半島は、温暖な気候のおかげで、四季を通じて色とりどりの花が咲き乱れています。カルミア、つわぶき、マグノリアなど、深紅、黄金、純白の色鮮やかな花が咲きほこります。そこは花の楽園でした。私はたちまち野辺の花に魅せられました。

海光は一日中変化してやみません。雲が流れ、風が吹き、木立が揺らいで、日の光は目まぐるしく変わります。風に吹かれて光が変わり、花の色が変わり、花の香りが辺りを満たします。光と花の競演は、まるでドビュッシーの「月の光」を聴くようでした。色彩と光のページェントに魅せられ、私は田畑、野原、雑木林で野辺の花を写し始めました。

## 花の輝きに魅せられて

撮り始めの頃は、芸術性の高い作品を撮りたいという意識が強く、肩に力が入りました。花が輝くように、際立つように、彩度の強い作品になりがちでした。真紅の椿、彼岸花、ガザニアなど、見た目にインパクトが強く、つい派手な作品になってしまいます。

撮影時も、焦点は合っているか、切り口はよいかなど、花が鮮やかに浮かび上がるように理詰めで迫りました。画面の切り取り方や順光・逆光・斜光など光の取り入れ方には気を使いましたが、背景のグラデーションにはあまり意識がいきませんでした。

高砂ユリがその例です。ユリの凜とした輝きを狙うため、白と黒の比率をどうするか、空間構成をどうするかを計算します。一期一会で出会ったユリの本質に迫るため、背景を一切削ぎ落としました。玉ボケを使うのは論外でした。

しかし、ある日夫から「こういう張り詰めた作品は、展示会で飾るにはいいが、寝室に飾るには向かない」と指摘され、ずっと気になっていました。たしかに、理詰めで考え均整のとれた作品ほど、見方によっては人工的な印象を与えます。もっと柔らかな作品を撮るにはどうしたらよいか、模索が始まりました。

## 移ろう美に目覚める

「なぜ人は花を美しいと感じるのか」。そんな根本的なところから、調べ始めました。その結果、人が花を美しいと思うようになったのは、ここ数千年のことと知りました。社会が豊かになるにつれ、人は儚<sup>はかな</sup>い花の命に自分の命を重ね合わせるようになりました。滅びゆくものに、美しさや哀惜や宿命を感じます。滅びの感覚と美意識はコインの裏表でした。

ネムの花は一日花といわれます。しかし、ネムがとりたてて儚いわけではありません。朝顔もユリも桜も数日で散ってしまいます。花の盛りもかりそめです。いつまでも咲き続けたら、人は花に見向きもしないでしょう。

移ろいの中に新しい美を見出し、私の作風は大きく変わりました。ペールトーンの昼咲き月見草、ライトトーンの朝顔、無彩色のヤツデなどの作品が、こうして生まれました。今では、玉ボケも自由に取りこみ、野辺の光や風や湿気などを表現しています。

## 花に染む心

心境の変化に伴って、撮影法も変わりました。それまでは花を外から観察して、「どうしたらうまく写せるか」と苦勞しました。花は写す対象でした。しかし、最近は花との距離感はなくなりました。花に浸り、花の世界に入るような感覚で写しています。

花に意識を集中し、静かに深く息を吐いて、花の世界に入っていきます。やがて「私が花を見る」のではなく、「花が私に語りかけてくる」不思議な感覚に陥ります。撮影していることを忘れて、いつの間にか花の世界に入り同化してしまいます。花に染まっていくのです。

花を写すときは真冬でも体が熱くなってきます。時間の観念がなくなり、1時間も2時間も集中して飽きることがありません。時間が止まってしまいます。花と一体になって、無心にシャッターを切ります。

後に知りましたが、これは瞑想法そのものだそうです。

これからどこへ向かうかは、私にも分かりません。

余剰を徹底的に削ぎ落とした「枯<sup>かれ</sup>山水<sup>さんすい</sup>」の世界に傾斜するのか、または、命の豊穡を寿ぐ  
「草木<sup>そうもく</sup>国土<sup>こくど</sup>悉皆<sup>しつがい</sup>成仏<sup>じょうぶつ</sup>」の世界に向かうのか。

四季は巡り、命は華やぎ、命は移ろいます。美を求める旅に終わりはありません。終わりのない旅に向けて、私は今日も野辺の花を写し続けます。

2022 年 11 月 24 日  
フォト・アーティスト  
秋津マキ子